

# 実践を楽しむ

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

二十世紀最後の年も暮れようとしております。皆様には、来るべき二十一世紀の幕開けと会創立五十五周年という大きな節目を前に、怠りなく日々精進の実じつをあげていらつしやることと思えます。

さて、今年はいかなる年であったか。いろいろなことがありましたが、人々に鮮烈な印象を残したことといえば、やはり高橋尚子選手のオリンピックでの快走、これに尽きるように思われます。

しかしそれは、単に高橋選手が金メダルをとったからというのではありません。高橋選手や小出監督の、「私は走るのが好きだから」「ぼくはカケッコが好きだから」その結果が出ただけだ、という言葉通りの走る姿や笑顔が、人々に共感を与えたのです。

「好きだから」という言葉で思い出すのが孔子です。孔子は『論語』のなかで実にしばしば「好」という文字を用いています。それも、何か事を為すためには「好き」になることが最も大切で、最も効果的だという意味で使っているように思えます。

孔子は言います。「戸数十軒程度の小さな村にも、忠実で誠実であるという点では、私（孔子）程度の人はきつといるだろう。ただ、学問（倫理）を好むことにおいて、私に及ばないだけだ」と。「好きだからこそ、より深く励みつづけることができるのだ、というのです。

しかし、「好き」より上があるともいいいます。

「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」と。

実をあげようと思うなら、その道について深く知っていなければならぬ。しかし、その道について深く知っている人も、それが好きだという人にはかなわない。さらに言えば、好きな人も、それを楽しんでる人にはかなわない。好きで楽しんでいる人こそが最高の実績をあげるのだ、という意味です。

確かに高橋選手の「好き」は、明らかに「楽しむ」ことと一つです。現にゴールに入った高橋選手は、「すごく楽しい四十二キロでした」と心から嬉しそうに語っていました。もし孔子がこの言葉を聞いたとしたら、我が意を得たりと頷いたに違いありません。

オリンピックに出るほどの選手たちなら、誰でもマラソンの技術や駆け引き、コースの状況などは深く「知っていた」に違いありません。しかし、あの難コースのアップダウンが「好きだ」と語り、レースを「楽しんだ」という高橋選手には、とてもかなわなかった、つまり「これを楽しむ者に如かず」であつたのです。

オリンピックのような大舞台に出るほどの選手たちなら、私たちには計り知れない努力を積み重ねた結果、選ばれてきたのは確かでしょう。しかし、それらの選手たちが、果たして「好きだ」「楽しい」というところまで到達していたかどうか。高橋選手に比べると、皆どこか辛そうな感じ、歯を食いしばって無理に無理を重ねている感じが付きまといつていたように思われてなりません。

「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、真の「上手」とは、他人から見て、惚れ惚れとするほど美しく見事なさまのことです。他の選手たちには、一生懸命さや必死さという悲壮感があったものの、惚れ惚れとする美しさや見事さ、特に見る側まで楽しくなってくるような爽快さには欠けていたと思います。

では、高橋選手の「楽しさ」の元は何なのでしょう。それは彼女の言葉の端々に表われています。

まず、人生に対して常に前向きだということです。私共の言葉で言えば、現実を大肯定しているということです。現実大肯定だから楽しいのです。

また、彼女はしばしば「感謝」という言葉を口にします。監督が、コーチやスタッフが、家族が、そして多くの応援してくれる人たちが、「私の背中を押してくれる」というのです。その人たちのために、その人たちと一緒に走るから楽しいのです。自分だけのために、自分だけで走るのではないから楽しいのです。

そしておそらく、何よりも自然と一体になって駆ける感覚が楽しいのでしょう。優勝した次の日の早朝も高橋選手は走っています。金メダルをとったことで風景が変わって見えるかと思ったら、「風はいつものように冷たくて、昨日と同じ自然だった。だから、自分も変わってはいけななんだ」と自らに言い聞かせます。自然と一体になる楽しさを彼女は確かに知っているのです。

もう、おわかりのことと思いますが、倫理の実践においてもまったく同じことが言えるのです。

倫理の何たるか、日々の実践の意義について知っているのと知らないのでは、もちろんその実りが違います。さらに、実践が「好きだ」「楽しい」という境地に至っている人は、ただひたすら実践に努めている人より、一段と実践の実もあがるはずです。まさに、「これを知る者はこれを好む者に如かず。

これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」なのです。そして、「好きこそものの上手なれ」の言葉の通り、好んで行なう実践は、はたで見えていてもその一挙一動がピタリときまって無理がなく、自然の摂理に適った美しさがあるものです。それは周囲の者にも爽快な思いを与えてくれます。

それに対して、本当はあまり実践が好きではない、楽しくない、実践が喜働きどうになっていないという場合には、無理が見えて美しくありません。

無理は長続きもいたしません。そもそもわが会の根本は、自然の摂理にそった自然な生活の実践です。無理な実践は不自然ですから、この趣旨にも反します。嫌々ながら無理をして実践するくらいなら、しないほうがましでしょう。無理なこと、不自然なことをしようとすれば、身体も心も壊れます。

しかし、朝起会に集うことも、「朝の誓」を実践することも、本来、自然で心地よいはずですが。心地よいから「好き」である。好きなことを実践するから「楽しい」のです。誰でも、そのようにして実践を深めていけるはずなのです。それが自然の摂理に適った、人としての道であるからです。

もし、それが楽しくない、というのであれば、どこか心の持ちようや生活そのものに不自然な点があるのです。実践における基本的な態度、つまり素直さがなく、あるものをあるがままに見て感ずる現実大肯定ができていないことによるのです。

高橋選手は私たちに、「好き」であることが何より大切であること、余計なことを考えず、好きなことを一途いちずに行ない、それを喜べる者こそが真の勝利者になれるのだということ、はつきりと教えてくれたのです。

素直に自分の心に向き合って、実践が好きだという自分の気持ちをしつかりと確認しましょう。そして、一途いちずに実践に邁進まいしんし、真の仕合わせを実現しようではありませんか。